

先入観 VS 想像力 = Preconception vs. Imagination =



人は、日々あらゆるものを先入観というフィルターを通して生きている。
性別、年齢、職業、国籍、性格。
その印象は本当に「見た」のか、それとも「思い込み」なのでしょう。
そんな素朴な疑問からこの企画はスタートしました。

この展示では、「先入観 VS 想像力」というテーマのもと
人体や物、風景の一部を切り取り、あえて欠落させた映像作品です。
切り取られ、欠落した部分に観る人の想像力と先入観を静かに衝突させる企画展です。

欠落した一部分。

そこから、人は「誰か」や「何か」を想像しようとする。
でも、その想像は、あなた自身の“内側”から出てきた想像です。
“無意識の思い込み”に気づく体験。
それは、あなた自身を映す鏡でもあります。
どう見るかは、あなた次第です。
あなたが世界をどう見ていたかに
もしかしたら少しだけ気づくかもしれません。

「想像する自由」と「思い込む危うさ」のあいだを歩く
体験型の企画展示実験をお楽しみください。



19. 20. 21. DECEMBER 2025

19_{Fri} 17:00-20:30 / 20_{Sat} 14:00-18:00 / 21_{Sun} 12:00-15:00

Place_U.Sinc showroom 東京都渋谷区神宮前6-19-1 2F
Entrance_free

Produced by Yusuke Izawa
Filmed by Ryota Sato
Graphics by Toshiki Asaga

先入観 vs 想像力 =

Preconception vs. Imagination=

無意識がつくる世界 | 井澤 佑介

人は、日々あらゆるものを先入観というフィルターを通して生きています。
性別、年齢、職業、国籍、性格…etc。
歳を重ね、経験を積み、蓄積された過去の経験のデータベースが増えれば増えるほど
あの人はさっそうだ、あの場所は多分こうだ。
こういう脱獄の人はこういう傾向がある。
と過去の情報、経験と符合させて先入観で物事を見るようになります。
それは経験則となり判断のスピードを上げる役割を果たす一歩で
その印象は本当に「見た」のか、「事実」なのか、それとも「単なる思い込み」なのでしょう。
もしかしら人は、ほとんど思い込みで生きているかもしれない。
そんな素朴な疑問からこの企画はスタートしました。

「先入観」 VS 「想像力」は、「思い込む危うさ」と
「想像する自由」とのあいだを歩く、体験型の企画展示実験です。
「先入観」 VS 「想像力」をテーマに
映像、立体、空間、音楽、食事など
さまざまな手法を通じて
聴覚、視覚、味覚、嗅覚、触覚といった
人間の五感インターフェースと脳を刺激する実験を行なっています。

“The World Shaped by the Unconscious” by Yusuke Izawa

We move through life filtering everything
through our own preconceptions—
shaped by gender, age, occupation, nationality, personality,
and the memories we accumulate.
Past experiences form a database that guides
how we interpret the present, often before we notice it.

But are these impressions truly “seen”?
Are they facts—or simply assumptions?
Perhaps much of what we perceive is
crafted by our unconscious mind.

This exhibition stems from that question.

“Preconception vs. Imagination” explores the tension
between the danger of assumption and the freedom of imagination.
Through film, objects, space, sound, food,
and multisensory experiments, the installation engages the five senses
and invites viewers to confront the filters through which they experience the world.

断片と想像のクリエイション | 佐藤 亮太

私たちはふだん、たった一つの断片から、世界のすべてを形づくろうとします。
見えた“部分”を手がかりに、見えていない“全体”を決めてしまう。
人は誰しも、無意識のうちにそのような判断を繰り返しています。

その背景にあるのは、個々が抱える膨大な記憶と経験のアーカイブだと考えています。
そこから引き出されるイメージが、目の前の光景を補完し、時に書き換えてしまう。
同じものを見ても、感性の違いが生まれるのは、この“個人のデータベース”が異なるからにほかなりません。
そのズレこそ、人間の認知が持つ面白さでもあります。

一方で、創作の現場では、この原理が常に葛藤として立ち現れます。
部分だけを提示し、あえて残す余地が、他者の想像力をどのように動かすのか。
制作者はその駆け引きの中に立ち、自分が意図した“全体像”と
観る人が立ち上げる“解釈”とのあいだで、静かに戦い続けています。

本展示は、そうした人間の認知のクセと、クリエイションの葛藤を重ね合わせる試み。
断片、欠落、曖昧さ——それらを通じて、あなた自身の中にある先入観と想像力がどう働くのかを体感していただけます。
見えていない部分を、あなたはどうのように補い、どんな世界をつくり上げるのか。

作品と対話しながら、自分の“見る”という行為そのものを見つめ直す。
そのためのインスタレーションとなれば幸いです。

“Fragments and the Imagination” by Ryota Sato

We often judge the whole from a single fragment.
What we see is shaped less by the object itself
and more by the memories and experiences we carry.
That is why the same scene can produce entirely different perceptions.

In creative work, this tendency becomes a quiet struggle:
how much to reveal, how much to leave open,
and how the viewer’s imagination completes what is missing.

This exhibition explores that tension.
Through fragments and intentional gaps,
it invites you to notice how your assumptions arise—
and what kind of world your imagination
constructs in the spaces left unseen.

バイアスのララバイ | 浅賀 敏樹

断定的な言葉を避ると、読んでいる貴方も、私も—
事実かどうかをさておいて満足してしまう。
これを書いている人は頭のいい人だ。それを理解している私は、エトセトラ...
余白を埋めることで、人は人格を偽れる。私はカバである。
そんな訳はないので、こいつはバカである。とまあこんな調子です。

700万年余りも生きてると、昨今の人間は肌を隠すことから始まり—
自分の余白を埋めすぎなのではないかと感じる場合があります。

されど第一印象。こう見せたい。ああ見せたい。でも見せなきゃ大抵損をする。
(そういう気がしてしまうのです)
どう見られたっていい「私は私」と高らかに。聞き直らにや窮屈。現代シャカイ。

その分、人には「良い先入観を持ってあげたい。」
たとえ裏切られたとしても、「想像力」でそれを上回れないだろうか。
「母さん、オレだよオレ。」
「あらサトコ??、大変だったんだねえ、あったかいシチューでも食べにおいで」
人間はそろそろ戦争を無くせないでしょうか？

“Lullaby of Bias” by Toshiki Asaga

Definitive words satisfy us, regardless of the truth.
By filling in the “margins,” we fake our personas.
“I am a hippo.” “No, you’re a fool.”

Living for 7 million years, I feel humans have filled
in their margins too much—starting with hiding our skin.
First impressions matter, but without declaring “I am me,”
society is suffocating.

So, I choose to hold “good prejudices.”
“Even if betrayed, can “imagination” not overcome it?

“Mom, it’s me.” “Oh, Satoko?
Come over for some warm stew.”
Isn’t it time humans put an end to war?



井澤 佑介 / Yusuke Izawa
Producer

1983年生まれ。アパレルメーカー広報兼
SVを経て株式会社リクルートに入社。
クリエイティブディレクターとしてブランディング業務
に従事したのち、U.Sincを創業。
ホテルやエディン、アート体験型のカフェなどの
企画・ディレクションを手がける。

Born in 1983. After working in public relations
and supervision for an apparel manufacturer,
he joined Recruit Co., Ltd.
There, he engaged in branding strategies
as a Creative Director before founding U.S. Inc.
Currently, he specializes in the planning
and direction of hotels, weddings,
and art-experience cafes.



佐藤 亮太 / Ryota Sato
Director, Creator

1995年生まれ。幼少期から自主制作を続け
映像・写真・デジタル表現へと活動領域を広げる。
株式会社リクルートでのブランディング業務を経て
株式会社ギルギルトウンを共同創業。
ブランドクリエイティブの総括として
TVCM・WEBCM、VFX、3DCGの仕事を手がけるほか
近年は世界的アーティストとの
国際的な撮影プロジェクトにも参加している。

Born in 1995, he began creating films in childhood
and has continued to expand his visual practice
across photography, film, and digital media.
After working in brand marketing at Recruit Co., Ltd.,
he co-founded GILGILTOWN Inc.,
where he leads branding and creative direction,
producing TV and web commercials,
VFX, and 3DCG works.
His recent projects include international collaborations
with globally active artists.



浅賀 敏樹 / Toshiki Asaga
Artist, Creator

1996年生まれ。アートは社会に何ができるか。
を考へ、アーティストとデザイナーを続ける。
株式会社Neutraの創業を経て
株式会社ギルギルトウンにジョイン。
ロゴデザイン、コンピュータグラフィックスを得意とし
「個と金」をテーマに「感覚で世界をひっくり返す」
GR66で全日本ラリー選手権「優勝」を目前している。

Born 1996. Artist and Designer exploring the
potential of art in society. After founding Neutra Inc.,
he joined Gilgil Town Inc. Specializes in logo design
and Computer Graphics. With the theme
“The Individual and the Whole,” he seeks to
“overturn the world through sensation.”
Currently aiming for the All Japan Rally
Championship title driving a GR66.



先入観 vs 想像力 =

Preconception vs. Imagination=



人は、日々あらゆるものを先入観というフィルターを通して生きている。
性別、年齢、職業、国籍、性格。
その印象は本当に「見た」のか、それとも「思い込み」なのでしょうか。
そんな素朴な疑問からこの企画はスタートしました。

この展示では、「先入観 VS 想像力」というテーマのもと
人体や物、風景の一部を切り取り、あえて欠落させた映像作品です。
切り取られ、欠落した部分に観る人の想像力と先入観を静かに衝突させる企画展です。

欠落した一部分。

そこから、人は「誰か」や「何か」を想像しようとする。
でも、その想像は、あなた自身の“内側”から出てきた想像です。
“無意識の思い込み”に気づく体験。
それは、あなた自身を映す鏡でもあります。
どう見るかは、あなた次第です。
あなたが世界をどう見ていたかに
もしかしたら少しだけ気づくかもしれません。

「想像する自由」と「思い込む危うさ」のあいだを歩く
体験型の企画展示実験をお楽しみください。

We move through our everyday lives filtering everything
through our own preconceptions—
gender, age, occupation, nationality, personality.
But are these impressions truly “seen,”
or are they simply assumptions we project?

This exhibition began with that simple question.

Under the theme “Preconception vs. Imagination,”
each video work deliberately removes parts of a body, object, or landscape.
By presenting only fragments, the viewer’s imagination
quietly collides with their own preconceived notions.

From a single missing piece,
we instinctively start imagining “who” or “what” might be there.
Yet that imagination arises from within you.
It reveals the unconscious assumptions you carry—
a mirror reflecting your inner gaze.

How you interpret these images is entirely up to you.
You may discover, even subtly, how you have been seeing the world.

We invite you to experience this experimental exhibition,
walking the fine line between the freedom to imagine and the danger of assumptions.

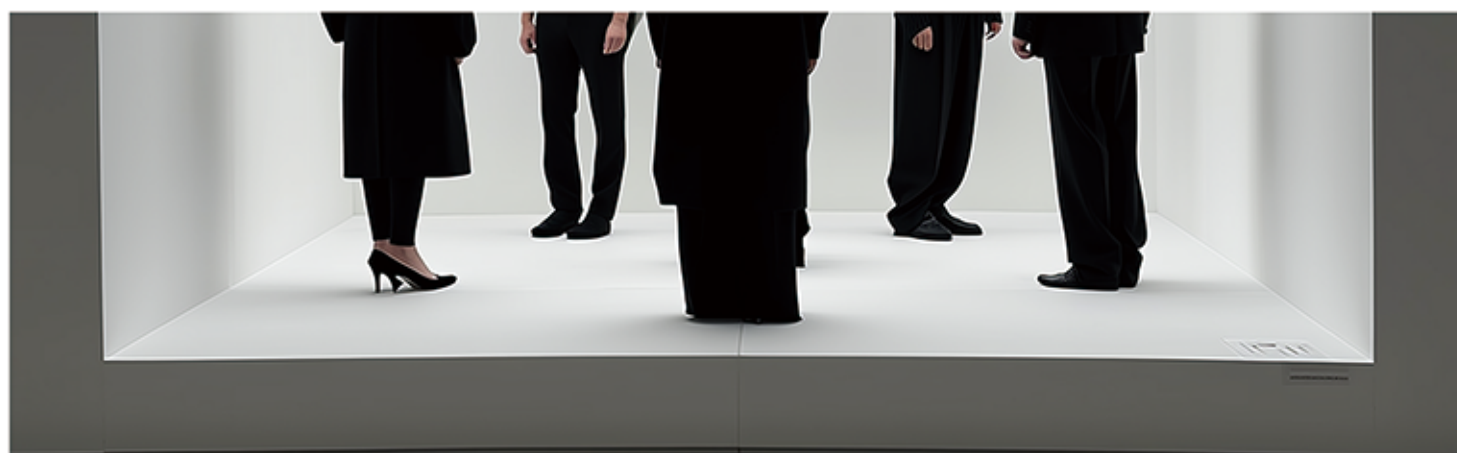
わずかな欠落が

あなたの想像と判断を浮かび上がらせる。

不完全な像に意味を与えるのは

自らの感覚と記憶。

見ているようで、見られているのは“あなた”。



PRODUCED BY
YUSUKE IZAWA

FILMED BY
RYOTA SATO

blanc

WARNING
To protect the privacy of the individuals shown, please refrain from taking photos or videos.
Do not upload any content to social media.